アンドレ・マルロオの挫折と発見

―小説作品にみるヒューマニズム追求の過程―

田中伸子

一、感動

一九〇一年に生まれ、現在もまだ多方面にわたる活躍を続けているアンドレ・マルロオは、歴史の流れの中に位置づけられるためにはあまりに我々に接近し過ぎているためか、あるいはまた、彼の作品自体が非常に多くの可能性と豊かさを内蔵しているためか、現在驚く程多岐にわたる評価を受けている。ある者にとって《二〇世紀の知性》であり、《時代の証人》[1]である彼は、他の者にとっては単なる冒険家やニヒリスト[2]にすぎず、ファシスト[3]として非難されていることさえある。革命をその本来の目的として捉えず、単に行動可能の場所、エネルギー発散の機会と考えるにすぎないマルロオ、他人への支配を偏執的に欲する主人公を創るマルロオ、至る所で「死」と「絶望」のイメージをぎらつかせているマルロオ、想像を絶した苛酷な舞台装置を作るマルロオ――。しかし、これらいろいろの問題点にもかかわらず、彼が得ている声価はやはり偉大なものである。《プルースト以来最高のゴンクール賞受賞作品》[4]と言われる『人間の条件』は、全世界に数多くの心酔者を生んだとも言われているのである。

確かに、『西欧の誘惑』から『アルテンブルグのくるみの木』に至る彼の一連の小説作品は、我々に内的な深い感動を与える。《最も投げやりで絶望的な》[5]彼の世界はそれだけに却って《美しく興奮的なイメージ》[6]を帯び、戦いと殺戮と血とに満ち溢れた作品は、にもかかわらず仄かな「抒情性」を漂わせている。何か陶酔のようなもの、悲壮でかつ情熱的な精神の動揺――読後、我々はこのような感情を禁じ得ない。そしてまた、この感動は、十九世紀の大作家達から受けるそれとは異質のものとして感じられる。文章の巧みさや人生の描写の巧みさ等から来るものではないこの感動は、むしろ我々の存在自体、即ち生きているという事実そのものが揺振られたこと、そこからくる感動なのではないだろうか。

では、この特異な感動、いろいろな問題点を含みながらもなお強烈な説得力でもって我々を撃つこの感動は、具体的にどうして惹起されるのであろうか。この特異な感動の源は、彼の作品にあって

一体何処に潜んでいるのであろうか。この源を探り追求することは――それによってこそ我々は、現代の奇才マルロオの本質を探究し、彼の多様性と豊富さの中にその中心核を発見することが出来るのではないだろうか。

この小論においては、マルロオへのアタック第一歩として彼の代表的小説作品に虚心な目を向けるものである。

二、不　条　理

マルロオは《死を自らの伴侶としている作家》[7]と言われる。確かに「死」はマルロオの中、至る所に氾濫している。ある時は絶望的な叫びに伴われ（『征服者』・『王道』）、ある時は安らかな微笑に包まれ（『人間の条件』清の場合）、またある時は非人間的な残酷さのうちに（『人間の条件』カトフその他の場合）。そして各作品の主人公はそれぞれこの「死」の恐怖に責まれ、またそれと戦いながら生きているのである。

※　　※

広東政府の指導者である『征服者』の主人公ガリンは、業半ばにして死を決定的なものにする病気に襲われる。そして彼はその病を自己の内部から生じて来、《自己だけに関わるもの》（C. p. 108）として、かつ自己の消滅を決定的に導くものとして捉える。ここにおいては、生きている自己を根底から否定するもの＝死は、彼の意志とは無関係にやってくるものであり、《何かあるものによって支配されているもの》（C. p. 114）である。「死」即ち「自己存在の否定」を人間自らが統御できないというこの事実、これは生きている人間そのものが無意味であり、人間の自己存在が虚無化されていることを意味するものであろう。ここにガリンの《不条理》（C. p. 114）に対する意識が芽ばえる。そしてガリンはこの「自己存在の虚無化」をこの上なく愚劣なものとみなす。ガリンにとって存在を自ら支配できないということは、生きてゆく上の最大の屈辱であり、不条理だったのである。

また『征服者』の二年後、一九三〇年に出版された『王道』は、ガリンによっては単に愚劣なものとして捉えられているにすぎなかった死に、より形而上的な意味を与えた。

主人公ペルカンは、数々の命を賭ける冒険によって人生の無意味さを実感的に経験し、そしてその無意味な人生の果てにある死に絶えず脅かされている人物であるが、しかし彼が恐れる「死」は殺されることによる死ではない。彼は単なる「生の可能性の断絶」としての死ではなく、《人間の失墜としての死》（V. R. p. 53）を恐れるのである。そして彼は、人間を虚無に落し入れるその恐るべき死を《老いる》（V. R. p. 158）という現象の中に意識している。即ちペルカンにとって「老い」による死は、自分の内部からの破滅を意味するものであり、人間の生命が進歩の過程ではなく破壊の過程であることを証明するものであり、従って、自己の現在の生そのものをも虚無化するものなのである。こうしてペルカンの中にも「不条理」の意識が育つ。なおこの不条理の意識は、これを愚劣であると評した時のガリンよりも遙に深い次元において把握されている。なぜなら人間を「時間」の展開の中に存在するものとして捉えたことからくる「老い」の意識、即ち「人間の一時性」の意識は、「人間

がその中で生きている世界の不条理」ではなく、「人間そのものが不可避的に背負っている不条理」の意識であるからである。ここにおいて、ペルカンが初めて使う≪人間の条件≫（V. R. p. 158）という言葉は大きな意味を持ってくる。

また『王道』は、『征服者』においては影の薄かった「孤独」の問題をも提出している。蛮族の毒筏による傷から死を余儀なくされたペルカンは、その間際に全く絶望的な孤独を感じる。不条理な死は、同時に不条理な孤独をも導くのである。そしてこの孤独の不条理は、次の『人間の条件』（一九三三）においてより多元的に展開されることになる。

死のテーマから出発し、孤独のテーマに終った『王道』の後を受け、『人間の条件』は確かに孤独のテーマを出発点としている。多数の登場人物中、特に中心的な位置を占める革命家・清、死にとり憑かれたテロリスト・陳、阿片に隠れ家を見出すジゾール老人――彼らは皆、どうしても埋めることの出来ぬ他人との隔絶感に苦しんでいるのである。

革命の中に人生の意義を見出し、存在の充実を感じていた清が、突如人間の根源的孤独に直面させられるのは、それまでの彼にとって唯一の救いであり支えであった妻メイが、他の男との関係を告白した時であった。そして清はその告白が齎らした深い孤独のうちに、唯一の強烈なものと信じていた愛によってさえも相手の全存在を所有することは出来ず、ただ所有出来るのは≪自分が変え得る部分≫（C. H. p. 218）のみであることを知る。そしてそれは同時に相手も彼の一部をしか所有してくれないことを意味するものであろう。この事実は、清が暗号を吹き込んだレコードで自分の声を聞き、それを自分の声と認識することが出来なかったという小エピソードによって象徴されている。≪他人の声は耳で聞き、自分の声はのどで聞く≫（C. H. p. 210）――即ち他人が自分を把握する仕方と、自分が自分を把握する仕方は自ら違ったものなのである。こうして清は、≪自分の全存在を把握出来るのは自分だけであり、他人は彼の行為によってしか彼を理解しない。自分は自分にとってしか絶対的な肯定であり得ない。≫（C. H. p. 218）という認識に達する。革命（＝他人との連帯）の中に存在の意義を見出していた彼にとって他人によってこのようにしか把握されず、自分もまた他人をこのようにしか把握し得ないということは、彼の以前の存在の意義を破壊し去るものであり、彼の存在を虚無に帰してしまうものであった。

これと同質の孤独は、陳が警察攻撃に際し仲間と手鎖を作って屋根から手榴弾を投げ込む場面にも、ジゾールが息子・清の死体に対面する場面にも現れる。死と同様やはり人間を虚無化する「孤独」、虚無化するという意味においてやはり不条理である「孤独」、しかしこれは死の不条理の様に個人的なものではない。孤独の不条理は、「死」という「人間の条件」を背負った人間同志がお互いに関与し合う所、即ち社会から生じるものなのである。こうして「不条理」は「人間の条件」においては社会のもつ不条理にまで深化された。

※　　※

『西欧の誘惑』（一九二六）において、≪神に継いで絶対的実在であった人間もまた死んでしまい≫（T. O. p. 174）、現代とは「献身

すべき理想」が全く存在しない時代である――ということを確かめたマルロオは、その時また同時に、理想がないというその現状を敢えて受入れた上で《自己》(T. O. p. 218) だけに頼って生きてゆく道を選んだ。理想が消滅し、統一価値を喪失した時代にあって唯一つ残っている「自己」――この様な形で「自己の生」を把握し、その上でそれを凝視した時、マルロオはしかし、「死」と「孤独」という免れ難い不条理に対面した。

「死」は生の内的破壊の証明であるが故に、「孤独」は存在の意義を否定するものであるが故に、それらは共に生を根源的に虚無化し否定するものであった。しかし社会との関係から独立し、また時間の外で生きることが本質的に不可能な人間にとって、これらの不条理から脱出するためにどのような努力が可能であろうか。人間は人間である限り決してこの宿命から逃れることは出来ないのではないか。ここにおいてマルロオにとって唯一の生きる根拠であったはずの「自己の生」も実に矛盾と虚無に満ちた、従って「信頼するに足りないもの」としての様相を帯びてくる。マルロオはこのニヒリスチックな確信から思想的出発をするのである。

三、反　抗

現代において、人間は《自己》以外に頼るべき何ものをも持たない。しかもその自己は自己が頼り得る存在ではない。――この絶望的な事実を確認したマルロオは、しかし決してこのニヒリズムに浸ってはいなかった。彼は人間をして自己を頼り得なくさせているものに徹底的に反抗し、それらを拒否することによってこのニヒリズムから脱け出そうとする。

※　※

自分の一生を自ら支配できないという愚劣さ、それは人間にとっては全くどうにもできない不条理である。しかしガリンは自らどうにもできぬことを知りながらもやはりその不条理に屈服することを拒み、断固反抗する態度をとる。《たといどんなことになってもこの人生で貴いことが一つある。それは決して打ち負かされないことだ》(C. p. 140) と叫ぶガリンにとって不条理に打ち負かされないこと即ち不条理への拒否・不条理への反抗は、それ自体で唯一の「人生肯定」の手段となり存在意義発見の場となっているからである。そしてガリンはその反抗の場（＝自己肯定の場）を行動の中に、とりわけ権力追求の行動の中に求めるのであるが、ここにおいてガリンが自らの行動を《創造》と呼んでいることは注目に値するであろう。ガリンにとって行動＝反抗は明らかに人生肯定と直結するものだったのである。なお彼はその行動の場として革命を選んでいるが、その動機が本来の革命思想とは全く無関係なものであったことは言うまでもない。

またガリンと同様の反抗を試みるものにペルカンがある。ペルカンが《俺は彼ら（凡俗な人間）の様に服従はしないのだ。》(V.R. p. 158) と叫ぶ時、また《これら凡てのものに抵抗して生きるってことは、それは死に抵抗して生きるのと同じことだ。》(V.R.p.160) と断言する時、彼はガリン以上の明確さを持って「反抗」の論理を説明している。彼にとっても「反抗」は不条理への拒否であり、従って生の肯定であり、存在意義奪回の場なのである。そしてペルカ

ンは、その反抗の場を《冒険》(V. R. p. 155)の中に求める。「自ら進んで自らの命を危機にさらすこと」を意味する冒険においては、生を支配しているのは自己自身であり不条理ではない。即ちペルカンにとって冒険は自己意志の支配権が不条理のそれに先行し得る場所としての意義を持っていたのである。ペルカンがシャムの蛮族モイに包囲され、小屋に閉じ込められる場面は冒険のこの意義を明確に説明する。彼が自らの全存在を賭けてモイと対決しようと決心した時、彼を襲う激情は、彼が自らの意志力で自らの存在を賭けることを選んだが故に生じる《人間の条件からの自己解放》(V. R. p. 193)の激情だったのである。この意味において『王道』の反抗は、冒険を通じての強烈な意志力(勇気)による反抗であった。その反抗はまた、人間の意志力を、不条理に対峙させ、その前で意志力の偉大さを誇示し、それによって「不条理」を「人間であることの誇り」に変えようとする努力であったと言い得るかもしれない。

やがてガリンにもペルカンにも破滅の時が来る。最後の瞬間が刻々と近づき、二人は死という不条理を益々痛切に感じなければならない窮地に陥る。しかし彼らは《己れの破滅の確証に対してもあくまでも反抗して生きてゆこうとする。》(V. R. p. 242)ガリンは破滅を前に盲執的な権力欲を吐露し、ペルカンは《生の極限においても自らを賭け》(V. R. p. 264)つくすことを自らに確かめる。しかし遂に破滅は来た。《死など、死などないのだ。ただ俺だけが死んでゆくのだ。》(V.R. p. 268)—ペルカンは最後の瞬間にも死という不条理、その人間共通の不条理の存在を拒否し続けるが、しかし生への執着と不条理への絶望感をこめたこの最後の悲痛な叫びは、やはり彼の決定的な敗北を如実に物語っている。

※　　※

現代の絶望的な不条理を強烈に意識している二人、そしてそのあまりの強靱さを知っているためか、打ち負かすことよりもむしろ、打ち負かそうとする努力そのものに生の肯定・存在意義奪回の場を見出そうとする二人——こうして二人の主人公を通じてマルロオは反抗することによる不条理克服を試みた。しかし二人の悲劇的な死は、マルロオが反抗すること自体による不条理克服には有効性を見出し得なかったことを示している。マルロオは、反抗することの中には全的な存在意義を見出し得なかったのである。

しかし、二人の主人公は敗北の瞬間にも反抗の気持を捨ててはいなかった。不条理の力の強靱さと直面しながらも屈服してはいない。——この事実はマルロオの不条理克服への模索がまだまだ続行されることを暗示しているのではないだろうか。

四、探　求

行動や冒険を通じての意志による無鉄砲な反抗は敗北に終った。不条理を眼前にしながら、即ち不条理と同一の次元においてはどんなに強い意志もそれに打勝ち得なかったのである。従ってマルロオの次の試みは不条理が存在しない世界、不条理を超越した世界、確実に自己を肯定し把握し得る別の世界を自らの中に作ろうとすることに向けられる。

※　　※

元北京大学の教授で、主人公・清の父親であるジゾール老人は、

人一倍鋭い知性を持っているために、不条理からは絶対脱出できず、しかし不条理の苦悩に耐えて生きることもまた不可能であるという絶望的な意識を持っている。そして彼は、その苦悩から逃れるために阿片の世界を選ぶ。阿片がもたらす完全な孤独――その他人と隔絶された世界の中に自らを没入させることによって、自らの意志も苦悩もそして自らの全存在をも自らの中に解消し去り、そこにおいて完全に解放されようとするのである。即ち不条理を全て受入れた上で自らを自ら阿片の中に虚無化すること、それによって外部からの不条理による虚無化を免れようとするのであった。《人間の夢は、人格を失わないで神になることである。》(C.H. p. 350) と言った彼は、阿片の世界の中で神になろうとしたのである。人間の条件からどうしても脱し得ぬ人間も、人間以上の存在・全能の存在になることによってそこから脱し切れる。――ジゾールは阿片の世界で神となって完全に解放されることが出来た。阿片の制限なき宇宙においては、彼は人間の条件を全的に受入れながらも平静であり苦悩に喘ぐことはない。しかし阿片の媒介によってこの美しい静観の世界を得たジゾールは、その世界の中では同時に、自らが人間であることをまでも解消してしまっている。彼によると真の不条理克服のための神は人格を捨ててはならなかったはずである。人間であるための不条理克服の過程において人間であることをまでも放棄してしまったジゾールの世界はここにおいて大きな矛盾を含む。結局ジゾールの静観の世界は真の不条理克服の世界ではなく、不条理からの一時的な逃避場・中毒の世界に過ぎなかったのである。

同様に中毒、とりわけジゾールのそれを遥に凌ぐ強烈で瞬間的な中毒の中に不条理克服の可能性を見る人間にテロリスト・陳がいる。

小説冒頭の有名な暗殺場面の主役であり、その初めての経験を通じて恐怖と血の世界の中で突如人間の重みから解放されるのを知った陳は、その時以来、死の魅惑とりわけ暗殺の魅惑にとり憑かれ始める。そして死に憑かれ、そのために死の世界に生きてはいない他の仲間を軽蔑するようになった彼は、その孤独に耐え切れなくなった時、苦悩から脱するために、今度は蔣介石の暗殺を企てる。初めての経験の時のあの死の昂揚を再び見出そうとするのである。彼は「絶対」への非常に強い渇望を持っている人物であるために、自らの脱出においても、それが最も強烈な形で完全に全的に成し遂げられることを望む。そして彼は蔣暗殺においては、彼を殺すと同時に自らも死ぬこと（＝彼の暗殺に自己の全存在を賭けること）、しかも手榴弾を抱いて走る自動車に飛び込むこと（＝一瞬に全てを賭けること）を選ぶのであるが、彼にとって自己の絶対的な把握は、瞬間においてのみ、また眩暈のような感覚的な形においてのみ可能だったからである。自己の唯一の完全な全的な絶対的な把握のためのテロリズム――陳は《歓喜》(C. H. p. 354) と充実感に満ちた陶酔のうちに自動車に飛び込んだ。この瞬間において陳は、殺人の世界における自己の全的把握に、苦悩からの解脱に成功したのである。しかしこの世界もやはり一種の敗北の世界であるといわねばならない。孤独の不条理に耐えかねて脱出を試みた陳は、確かに苦悩からは解放された。しかし自らの身の破滅と引換えに得なければならぬ解放が真の解放と言えるであろうか。孤独という社会的な不条理を克

服するためにテロリズムという純粋な社会拒否の個人的な世界に縋ろうとすること、それは必然的に挫折をしか導かないのではなかろうか。陳は所詮、《自ら光を発し、それで身を焼く陽炎》(C. H. p. 295)(清の陳評)にすぎなかった。

その他マルロオは、骨董商クラピック(『人間の条件』)を通じては「うその世界」・「夢想の世界」即ち現実の自己像を意識的に否定する世界の中に、女性への暴力的征服を好み、政界の支配を企むフランス財界の巨頭フェラル(同)を通じては「権力の世界」の中に解放の可能性を求めた。しかし究極的にマルロオを満足させるに及ぶものは何もない。クラピックは《美しいが、しかし空っぽな心》(C. H. p. 376)(ジゾールのクラピック評)の持主となるにすぎず、フェラルは野望かなわぬ敗北者となるのである。

マルロオの不条理克服の世界への探求は、敗北にばかり終っている。不条理のない世界を発見することはやはり絶対的に不可能なのだろうか。次に『人間の条件』の主人公・清・ジゾールの場合を考えてみよう。

清は虐げられた貧しい人々に人間としての威厳を与えてやること、そのために彼らと共に闘うことに、自らの生活の規律を見出し、人生の意味を見出している人物であるが、しかしその彼にも不条理の苦悩はあった。妻の告白によってもたらされた絶望的な孤独etc——しかし、これらの個人的な人間としての彼に襲いかかってくる不条理をも、彼は革命行動の中で克服しようとする。後になって逮捕された彼が閉じこめられた牢獄も彼にとっては《孤独と屈辱》(C. H. p. 389)に満ちあふれた不条理の世界であった。単に肉体的自由を奪うのみならず、高貴な精神性を持った人間としての自らの存在をも他人の支配下に投げ出させるもの=牢獄、そこで罪人としての条件に甘んじることは、屈辱を受け入れることであると考えた彼は、拷問されている狂人を救うために看守に反抗する。そして自らの高貴な意志の努力によって狂人を救い得た時、それは彼にとって一人の哀れな人間の救済であると同時に、自分自身の人間としての崩壊の救済でもあった。ここにみられる彼の革命的活動と、自身の解放探求の結びつきは、警察の調べに際し、《自尊心とは屈辱の反対です。》(C. H. p. 394)と叫ぶ時の彼の言葉に明確に象徴される。即ち彼にとって自己の運命に対する戦いと、貧乏に対する戦いは、共に自由の追求、屈服と失墜の拒否という意味において、また人間の尊厳回復というきづなによって、全く同質のものだったのである。こうして彼は、自己自身の不条理の全ての苦悩を革命的行動の中に解消してゆく。

やがて逮捕された清に死刑の時が来た。革命を戦ってきたことに満足を感じ、また共に戦い、共に死んでいこうとする人々の間で、とりわけ同志カトフの絶対的な友情に包まれて、清は処刑の前に自ら青酸カリを咬みくだく。彼にとってその死は孤独ではない死であり、穏かな死であり、むしろ《生の至高の表現》(C. H. p. 407)と感じられる死であった。仲間と共に働き、苦しみ、そして、今、その彼らに囲まれて死んでゆくが故にこそ、その死は苦悩のないむしろ有意義なものなのであった。ここにおいて彼を死の苦悩から救済しているものは、正に「共同存在の意識」「同志愛 fraternité」というべきものであろう。マルロオに見る初めての安らかな苦悩の

ない死、そしてそれを導いた fraternité の世界――ここに存在意義奪回の試みへの一つの希望が生れた。「fraternité の世界」はマルロオが認めた初めての肯定的で人間的な解放の世界である。

※　※　※

ジゾール老人・クラピック・フェラル――「私」という限界を打破ることなく解放を求めた彼らに比して、共に戦い、共に苦しんだ清は、こうしてそこに社会的で人間的で真実な「fraternité」という解放の世界を発見した。『人間の条件』の種々の登場人物を通じてマルロオが探求した不条理克服の世界はここに一応の発見を見る。そしてマルロオは、清において「革命」という行動のもつ大きな意義を認めた。貧しい人々の救済と自己自身の尊厳回復を同時に志向するものであり、かつ fraternité の美しい世界を生み出すものである革命は、彼にとって最高の不条理超克の場となったのである。

五、人　間

不条理超克の試みは『人間の条件』において一応の方途を見出した。そして次にあらわれる作品『侮蔑の時代』（一九三五）と『希望』（一九三七）は『人間の条件』の方途を引継いだ形の fraternité 昂揚のドラマであり、《fraternité の絶えざる affeurement》[8] に満たされた作品であった。しかし、この fraternité をもたらすものとしての革命の世界も最後まで有効性を保持することは出来ず、『希望』は既にその大きな矛盾を垣間見させている。マルロオが探求の終着駅に着くにはまだまだ多くの模索を必要としていたのである。

※　※　※

『侮蔑の時代』と『希望』にあって最も美しく感動的な場面は fraternité が輝きを放っている場面である。前者の主人公カスネルが大苦心の末、やっとのことで隣の牢の囚人からの暗号を解釈する場面、後者の主要人物マニャンが不時着機の部下を救出して山道を降りてくる場面……。その fraternité は『征服者』に見られるような、単なる戦いの協力者としての肉体的な fraternité ではなく、運命から解放された宇宙を作るところの《何ものにも換え難い最高の》（E. p. 743）fraternité であった。しかし fraternité の獲得と、人間の自由と尊厳の保持とのみを革命から期待しているマルロオと、プロレタリア解放のために戦いの結果（＝勝利）を目指す革命組織との間にやがて対立がおこってくるのは、やむを得ぬことであろう。《モラルの完成や高貴な精神は個人の問題であり、革命はそれとは結びつかない。》（E. p. 614）《どんな国もどんな社会機構もただ人間の高貴さの条件を作るだけだ。》（E. p. 765）（ともに革命軍ガルシャの言葉）という形で革命への認識を新たにする一方、同時に《経済的束縛を破壊するために政治的・宗教的等々の束縛を強化しなければならないのなら革命は無意味である。》（E. p. 703）（芸術家アルベルの言葉）という形でマルロオは来るべき革命との訣別を予告している。『人間の条件』において革命の意義を大きく認めたマルロオであったが、要するに彼にとって重要だったのは革命そのものではなく、活動の場を提供するものとしての革命的戦いだけだったのである。

かくして『希望』の六年後、一九四三年に出版された『アルテンブルグのくるみの木』では、革命のテーマは必然的に消滅している。この作品においてマルロオの関心の的となっているのは、最早、死や孤独という個人的意識としての「不条理」ではなく、「≪人間≫(N. A. p. 297) とは何か?」ということ、≪その上に人間の基本的概念を築きうる既定事項は存在し得るのだろうか?≫(N.A. p.150) ということ、即ち「新しい人間のイメージ」の確立である。不条理という人間の持つ宿命に人間全体を対置させ得るために、彼は今度は、人間の forme を見つけようとする。人間共通の性質の中から宿命に対置し得る基本的・根源的なもの、人間を人間たらしめる所以のものを捜そうとするのである。

≪作家として十年来人間だけにとり憑かれてきた≫(N. A. p. 29) 「私」によって人間発見の先輩として回想される「私」の父ヴァンサン・ベルジェは確かに一つの「人間」を発見した人物であった。息子と同様絶えず「人間」に憑かれていた彼は、大トルコ帝国建設や第一次大戦に参加する行動の過程において、幾度か人間の≪Apocalypse≫に出合っている。彼は父の自殺に直面して何か≪生の秘密≫(N.A. p. 91) の様な神秘を漠然と感じた。また叔父ワルターの庭で見たねじくれた巨大な「くるみの木」からは、生命の≪内部からの表出≫(N. A. p. 151) 「生への意志」を読み取った。そして待避壕の中でロシア軍への毒ガス攻撃を待ちながら、相変らず≪昔ながらの調子≫(N. A. p. 139) でしゃべり、快活さを失わぬドイツ兵達を見て「神秘的な生命の力の存在」を一層明確に感じた。命の危機を前にしているにもかかわらず、これからも生き続けてゆくという前提に立った上で、同じ日常性を保っているドイツ兵達、そしてその時、高い空を飛び過ぎて行った渡り鳥の命に溢れた姿、それらの中にヴァンサンは「生の尽きることない強烈な躍動」を実感したのである。そしてその毒ガス攻撃によってやられたロシア兵を救出するドイツ兵の姿は、彼に更に決定的な人間発見の契機を与える。負傷した敵兵を担いだドイツ兵達が作る≪白い点々と切れぎれの列≫(N. A. p. 234) は、それを丘から見つめている彼に対して≪死に果てた光の燃焼が「秘密の生命」によって活気づきおのいているような≫(N. A. p. 234) 感じを与えた。ヴァンサンは負傷者を救おうと彼らを運んでいる兵士の重々しい足取りの中に、≪秘密の生命≫即ち「全人間が共通に持っている神秘的な生命力」を再び見出したのである。特別の知性や意識を備えている訳ではない無名の群象の無意識的な活動であるこの敵兵救助作業――ヴァンサンはそこに、人間に生来備わっている根源的な力としての「生への志向」＝「生命力」を見た。こうして幾度かの経験の積み重ねによってヴァンサンは、「根源的な人間性」とは「全ての人間をつき動かす神秘的な生命力」であり「人間」とは「その生命力の躍動であり、また共通に生きようとする意志」であることを発見するに至り、同時に≪生命の意味とは幸福なのだ≫(N. A. p. 245) という形で神秘の発見からの爆発的な喜びを味わう。しかし無論この喜びは、発見に対する心理的反応にすぎず、マルロオ自身も喜びは≪初めから毒されているのだ≫(N. A. p. 289) として気付いているように、決して不条理超克の積極的な試みに繋るものではない。従ってこの「生命の神秘」の発見は、全小説作品を通じての彼の試みに解答を与えるものでは

ないが、しかし一連の小説作品の終着点であることは確かである。「神秘で強烈な生命力を持った人間」――この発見が以後どんな発展をしていったのかは、ゲシュタポによって破棄されたという後篇のみが答えてくれるのかもしれない。

※　※

なおマルロオは、『アルテンブルグのくるみの木』を最後に小説の筆を絶ち、やがて人間救済の道を芸術の中に求める態度に変わってゆくが、その崩芽は既に『アルテンブルグのくるみの木』の中に見られる。歴史学者ワルターは、狂気になった友人ニーチェをイタリアから連れ戻す最中、貧しい人々と同乗の明りもない三等列車が長いトンネルに入り、悲惨と恐怖が辺りに立ちこめた時、ニーチェが自作の詩を歌い、その力強さによってあたりの全てが変化するのを目前に経験した。そして≪丁度我々の哀れな運命が星空に消されるのと同様に何千という星を散りばめた空が人間によって消されるのだ≫(N. A. p. 97)という感慨と共に彼は、ニーチェの歌に似た何ものかによって≪自分の尺度≫で世界を作り直す可能性が人間に与えられていることを知った。そしてその経験を基に、後にワルターは≪宿命を表現出来るという事実、それだけが宿命を真の運命から、仮借ない神の尺度から免れさせ、人間の尺度に帰せしめるものなのです。その本質的な点において、私達の芸術は世界の人間化です。≫(N. A. p. 128)と語るが、それは、正に後の芸術論が主張するところのものである。

六、発　展

「献身すべき理想」が存在し得ない時代に、敢えてその状態を受入れた上で、自己だけに頼って生きてゆく道を選んだマルロオは、『征服者』から『アルテンブルグのくるみの木』に至る一連の小説作品を通じて、常に行動する人間を描き続けた。冒険をする人間、革命を組織する人間、戦争に参加する人間、……。そして作品を順に読んでゆく時、我々は作品毎に毎回何か新しいものが眼前に示されてゆくことに気づく。即ちマルロオの思想は作品を追う毎に絶えず段階的に発展していたのである。『征服者』から『人間の条件』への移行のうちに表現される不条理は、実感的不条理（ガリン）から形而上的不条理（ペルカン）へ、人間の不条理（『王道』）から社会の不条理（『人間の条件』）へと発展してゆく。その超克の試みは、結果を顧慮しないでただ激しく戦うのみの盲目的反抗から、新しい次元の世界の探求へと発展し、その新しい世界においても陳・ジゾール老人等の個人的試みから、清の社会的な試みへとより高次なものへ発展してゆく。自らの破滅と引換えに自らの救済のみを願う初期の人物は、やがてより深い人間に達しようとする意図を持った団結する人物にとって変わられる。一人で生き一人で死なねばならぬ悲劇的行動が、多産な行動へと発展したのである。そして最後には、新しい世界への探求は、≪人間とは何か≫という人間の新しいイメージを創ろうとする努力へ発展する。「個人」の救済の問題から「人間」の救済の問題へ、マルロオの小説はこうして徐々に普遍的に一般的に、従ってより豊かになってゆく。この意味においては『征服者』以後の一連の小説は確かに≪人生の追求における宿営地の標識≫[9]と呼び得るであろう。

そしてまた、この恒常的段階的発展の底には常に、マルロオの人

間尊重の精神が流れていたことをつけ加えねばならない。「人間の生」を虚無化させている不条理を、なんとか克服しようとする彼の努力は、人間の生を有意義なものにしようとする努力であり、生の存在意義を何処かに求めようとする努力であった。またそれは、言い換えれば、不条理という非人間的なもの（＝人間を苦しめるもの）から真に人間的なもの（＝人間に自らを肯定せしめるもの）を救おうとする努力であり、非人間的なものに満ち溢れている人間の中に、それに代る真に人間的なものを捜し、築き上げようとする努力でもあった。人間存在に関心を払い、その状況を深く考察し、そしてその人間的なものを守ろうとする態度――それは、マルロオの底に絶えず流れていた精神なのである。

※　　※

この小論においては、マルロオの小説作品を通じて、彼の中心的らしく見える思想の図式化を図って来た。勿論彼の思想は周知の如く非常に多元的で複雑なものであり、従ってこのような形で思想形成を固定しまうことは早計にすぎるかもしれないことをつけ加えておかねばならない。本論の分析は、単なる図式化を目指したものであり、これを出発点に以後色々な問題が浮かび上って来ることを期待するものである。

（この小論は、卒論の一部をまとめ、手を加えたものである。）

T. O.: La Tentation de l'Occident; Grasset
C.: Les Conquérants; Bibliothèque de la Pléiade
V. R.: La Voie Royale; Grasset
C. H.: La Condition Humaine; Bibliothèque de la Pléiade
E.: L'Espoir; Bibliothèque de la Pléiade
N. A.: Les Noyers de l'Altenburg; Gallimard

注

(1) Gaëtan Picon, Pierre de Boisdeffre, Joseph Hoffmann はマルロオを時代の証人と認めている。
G. Picon; André Malraux p. 15
P. de Boisdeffre; Malraux p. 19
J. Hoffmann; L'Humanisme de Malraux p. 5

(2) ガブリエル・マルセル
「マルロオの英雄的行動は絶望した魂が行う気晴しにすぎない。」

(3) P. de Boisdeffre; Malraux p. 35

(4) レオン・ピエール・カン

(5) G. Picon; André Malraux p. 21

(6) 〃

(7) クロード・モリアック

(8) J. Hoffmann; L' Humanisme de Malraux p. 221

(9) G. Picon;André Malraux p. 19